

データベース

弘前藩庁日記ひろひよみ(御国・江戸)

の作成にあたって

気象予報士 福眞吉美

弘前藩庁日記は、弘前藩が弘前城内で記録した「弘前藩庁日記（御国）」・江戸藩邸で記録した「弘前藩庁日記（江戸）」からなる。弘前藩庁日記を自明とした場合は、それぞれ「御国日記」・「江戸日記」とも呼ぶ。

「弘前藩庁日記ひろひよみ（御国・江戸）」は、御国日記・江戸日記に記述された事項中、重要と筆者が判断した事項の現代語訳である。日記の全体を訳したものではない。ただし、御国日記の現代語訳は「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1」（1661年～1740年）及び「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.2」（1741年～1868年）としてすでにお届けしている。このため今回の新規分は、その江戸日記部分のみである。この部分を「本書」と呼ぶ。本書には、同時に見ることができるよう、御国日記部分も併せて示した。御国日記部分の内容は、「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.2」と同じであるが、ファイルの名前・ヘッダーの記述・誤記等に最小限の変更を加えた。

作成には、14年余りを要した。当初の意図と必ずしも一致していないが、弘前藩庁日記に記述された非常に多くの事項に関する、データベースに準じたものとなった。

解 説（江戸日記部分）

1 弘前藩庁日記（江戸）の特徴

1-1 日本史の中の弘前藩庁日記（江戸）

弘前藩庁日記は、御国日記と江戸日記を合わせて4500冊ほどに及ぶ。ただし、1冊の定義は、判然としない。1ヶ月分を数冊に分けてあったり、数か月分を1冊にまとめた例も見られる。

弘前藩庁日記（江戸）（以下、「本日記」という。）は、弘前藩の江戸藩邸が書き遺した毎日の日記で、寛文8年5月11日(1668年6月20日)から江戸時代末の慶応4年3月16日(1868

年4月8日)まで存在する。約1220冊からなる。因みに御国日記の場合は、1661年6月29日から1868年1月24日までの約3300冊である。誤字・脱字は当然あり、若干の欠落もある。弘前藩は、江戸時代を通じて主に青森県西半分を支配した、初期に4万7千石・末期に10万石の藩である。

本日記は、弘前市立弘前図書館に正本とその製本された写本が保存されている。正本は和とじて、殆どの場合表紙に毛筆で「日記」と書いてあり、写本は表紙に「弘前藩庁日記(江戸)」と印刷されている。いずれも常時は展示されておらず、その都度貸し出してもらう。正本・写本共、図書館内の調査室で閲覧(無料)可能で・正本の写真撮影(無料)並びに写本のコピー(1枚10円)もできる。並べた写本の厚さの合計は、約39メートルである。因みに御国日記の場合は、約85メートルである。持ち出しは、正本・写本共、禁じられている。現代語訳は、個々の事件に関するもの(例えば、「続津軽覚え書」中の赤穂浪士の討入り後の宣言文)以外には、存在しない。

本日記は、江戸時代の東京における最も古い公的日記である。これに次ぐものとしては、八王子市の「石川日記(1720年~1895年)」くらいである。多くの藩等が日記を書いているが、弘前藩も経験した火災による焼失・出水による濡損、屋敷替え等で他藩に見せないための焼却、漉き直して新たな紙の原料とする、裏返して習字練習用の反故紙としての有効利用、紙魚(シミ:紙を食べて生息する虫)の被害などで消滅したものであろう。

個人の日記には、もっと古いものもあろう。しかし、日記と称しても日付が必ずしもない、期間が短いなどの問題があり、個人の視点であることが決定的な弱点である。情報収集能力にも差があるだろう。本日記の場合は、公的な記録であるからこそ、書けない事項もあった可能性がある。

本日記に記述した歴史的事実の例として、宝暦(1751~1764年)という年号の読み方がある。読者のみなさんは、どのように読まれるだろうか、多くの辞書にはどのように書かれているのだろうか。本日記には、これを「ホウリャク」と読むことが明記されている。筆者が現在使用中のパーソナルコンピュータでは、ホウリャクを漢字変換すると「方略」のみ、ホウレキで変換すると「宝暦」のみが出てくる。

1-2 本日記の記載内容

本日記の現代語訳作業は、退屈であった。特に初期の記載事項は、毎日の天気以外は藩主の日常生活と珍しいことが若干である。毎日、何時に朝食を召し上がり、夕食を召し上がり、御夜食を召し上がったということが書いてある。その内容も蕎麦切りであったりうどんであったり延々と続く。次いで多いのが他の藩主・旗本との交際、物品の贈答・法事等の宗教行事である。本日記には、その内容を示す文献(例えば、弘前市立弘前図書館が昭和45年に発行した「弘前図書館蔵郷土史文献解題」等)が存在しない。

記述内容を、先に紹介した「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.2」(以下「御国日記」と書く。)

と比較すると、次の通りである。

御国日記に毎月明示されていた役職名は、ほとんど見えない。

年月日の次が天気で、これに続く本文中は、前述の食事等が中心である。藩士任免・役替え・家禄の増減・家督・改名・縁組など士族人事に関する事項、江戸における火災・洪水状況などが記されている。国政に関する決定（竹嶋をどうしたか等）については、竹嶋の処理を決定したであろう元禄期にも見えない。

御国日記に書いてあった、屋外における死者・御家中の死亡・処刑（切腹・磔・火あぶり等の別）・河川の結氷、地震・火災・洪水・死者を伴う雪崩・雹等の災害・狼等の被害・季節の献上物等は、江戸で事態が生じないからであろうが、ほとんど記載がない。

藩主は、参勤交代で、ほぼ1年おきに江戸と国許に住む。藩主の在江戸期間の記述が多い傾向が見える。

天気の変化・火災の発生等には、時刻もほぼ記述されている。1日の始まりと終わりの時刻は、現在と同様に夜間の0時を基準にしているはずである。しかし、日が昇るまでを昨夜としている例もあり、よく分からない。

時刻は、0時付近の子刻（または九つ）に始まり、丑刻（八つ）、寅刻（七つ）、日の出頃の卯刻（明六つ）、辰刻（五つ）、巳刻（四つ）、正午頃の午刻（九つ）、未刻（八つ）、申刻（七つ）、日の入頃の酉刻（暮六つ）、戌刻（五つ）、及び亥刻（四つ）と進む。午の上刻・后（後）刻・下刻などと細分されている場合も多い。日の出・日の入を基準にしている時間も季節的に変化するが、その精度は筆者には分からない。

1-3 読者と執筆者

本日記が想定した読者は、藩主であろう。弘前藩四代藩主津軽信政（五代目であるとの有力な説もある。）の命で作成されていて、そのための組織も作られている。その用途は分からないが、1年前の日記を見たとの記述もある。

具体的な筆記者は多くの組織の担当者であるが、その原稿作成者は、公的な記録であり、不明である。しかし、御国日記と同様御用人が主に書いたものと筆者は考える。御用人であれば御家老に次ぐ事務方の次席であり、藩内のすべての情報が集まっているのも当然である。夜間の天気等については、門番・火の見櫓などの常時勤務の部署からの情報も用いたであろう。

なお、文政の頃には、弘前藩の上屋敷（藩主の公邸?）が火災で焼失し、日記の原稿も合わせて焼失した例がある。この中では、御用人の記述部分が焼失し、御家老の記録だけが残り、それを日記として保存した例が見える。

1-4 記述手法

本日記は、縦書きで、和紙に毛筆で記録されている。事項ごとに「一」から始まる「一つ書き」である。

文字は、江戸時代の標準文字が中心である。したがって、「くずし字用例辞典：児玉幸多」等の辞典でほぼ読める。文章は漢文とかな交じり文が交じっている。かなは、カタカナ・ひらがながあり、変体仮名やその元の漢字も交じっている。例えば、時間の経過を、朝から昼までと示す場合、朝より昼までと記述する例が多い。この「より」の記述法として、「自」・「従」・「より」・「ヨリ」・「よ里」・「説明できない形であるが（より）が合体した記号」があり、「自朝・従朝・朝より・朝ヨリ・朝よ里・朝（よりの合体記号）」のように記述されている。

「が・ざ・だ・ば」等の濁点は、例が少ないが用いられている。一方、「ば・び・ぷ・ぺ・ぼ」の半濁点は、数例だけ見受けられ、すべてカタカナであった。「ポント」とあったものは、質量の単位のポンドらしい。

「と」と書いてある場合、「と・又はど」と読み、「ど」と書いてある場合「ど」と読む。「は」と書いてある場合、「は・ば・又はぱ」と読み、「ば」と書いている場合は「ば・又はぱ」と読む。例えば「かっぱ」（河童）は、「かわわつは」10日ほど後には「かわわつぱ」と御国日記には書かれている。当時の濁点・半濁点は、現代の絵文字のようなものだったのかもしれない。前後の文字で読み方が異なる例は、現在にも存在する。全部ひらがなで「ぎんぎのやなぎ」と書いてあれば、どのように読まれるだろうか。最初の文字と最後の文字は同一であるが、発音が異なると考えられないだろうか。

地域的な方言・訛りは、ほとんどない。最近使われているいわゆる津軽弁は、全くと言えるほど使われていない。一方、文化が伝来した中国発祥の記述手法は、守られている。例えば、殿と様の使い分け、尊敬すべき名詞・動詞等に対する台頭・平出・欠字については、ほぼ守られている。

時代と共に曖昧になる傾向が見えるが、手紙文などを除くと、様をつけるのは藩主とその家族並びに幕府の旗本、殿をつけるのは御家老以下の藩士と幕府の御家人と考えてよい。

台頭とは、天皇等圧倒的に尊敬すべき対象・行動を記述する場合、行を替えかつ普通の行頭よりさらに上から書き始めること。平出とは、尊敬すべき対象・行動が文中にある場合、改行して行頭にすること。欠字とは、平出より軽微な尊敬表示で、直前を一文字あけて尊敬を示すものである。ただし、台頭の例は本日記中には一度（用語は「東照宮」）あるだけで、平出と欠字の用法の区別は判然としない。時代とともに変わるかもしれない。対象となる用語としては、勅許・崩御・殿様・若殿様・近衛様・御意・城・御公儀・仰せ付け・御目見え・御出などがある。

1-5 日付は正しいのだろうか

歴史的事実が生じた年月日は、比較的知られている。当時使用していた暦と現在のグレ

ゴリオ暦との対照も可能である。例えば、「日本暦日原典：内田正男」によると、本日記が始まる寛文8年5月11日は1668年6月20日である。本日記から見られる歴史は、何月何日何時にどの町で何軒の火災があったというようなものである。日付・時刻まで分かることは、すばらしい事である。

とはいえ、本日記に書かれている日付が常に正しいとは限らない。しかし、本日記の日付は、古文書につき物の間違いを除き、殆どが正しいと筆者は考えている。藩内の行動を規制する日付の変更は、日記に記述されると推定されるからである。

本日記には、これも古文書につき物の紙魚の食害等の影響で、日付の不明瞭な部分もある。特定の日の干支・大の月小の月の区別から年を特定し、写本に印刷されていた年の誤りを指摘・訂正した例もある。個々の日付のずれとしては、恐らく御国日記より多数が、認められる。適宜訂正して、その事情を本書の文中に示した。

2 本書の編集方針

2-1 本日記の重要性

地球温暖化の問題点が指摘される中で、1990年にはIPCC（気候変動に関する政府間パネル）が設立され、1992年には第1回の評価報告書を発表した。次いで1996年、2001年及び2007年に発表している。これらの活動が評価され、IPCCは2007年のノーベル平和賞を受けた。最近の第5回の評価報告書は、2013年から2014年に発表された。IPCCの評価報告書は、地球温暖化の過去・現在・未来、その影響、可能な対応策を調べてそれぞれの時点で評価している。この中の地球温暖化の未来予測は、主としてコンピュータ予測による。

未来の予測精度は、正しい・長期の過去データに依存するはずである。この場合の具体的な過去データとして、弘前藩庁日記（江戸）は重要な意味を持つ。しかし、持ち出し禁止の大量のデータを読み取るためには、古文書を読める人が弘前市立弘前図書館に通わなければならないという制約もある。これを現代語に訳し、世間の皆さんに示すことが、幸い弘前市に住み、古文書も少しは読めるようになった筆者の使命と考えたものである。

2-2 記述する資料の選択

気象・農産物・気象災害等は、年周期をする。その主な理由は、太陽と地球の位置関係であり、グレゴリオ暦が対応する。したがって本書の日付は、「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1 並びに Vol.2」と同様、グレゴリオ暦を中心とした。当時の暦の年号は、写本に印刷されている年号を書いた。改元を事後推定して年号を事前に変えて印刷した例もあった。

本日記中の日付の下には、その日の天気・地震・稀に二百十日・出水状況・オーロラなどが記載されている。原本の記述方法は異なるが、この部分は、すべて現代語に訳した。送り仮名が突然カタカナになったり漢字で止めてあるために読みにくいのは、原文に忠実にした部分も多い。関係しそうな火災状況も記載されている場合もあるが、こちらは意味が分かる程度に記した。

天気等の次には本文があり、その中には、積雪の深さ・地震被害・洪水被害の大きさ・火山噴火の影響などの、自然に関係する事項が記述されている。これもすべて現代語訳しカッコ内に定量的に示した。ただし、主として意識である。

御国日記のように、倒死（行き倒れ）・殺人・なだれ・落雷・刑死・牢死・自殺等の死者、自然現象の被害等の大きさ・季節の献上物、関所の通行人数、岩木川の結氷・解氷、狩猟の収穫物、切支丹（類族）の人数、飢饉対応として御救い米を出した人数などは、全くと言ってよいほど記載できなかつた。

記述内容として多い、贈答・宗教関係行事等、人類の将来に影響を及ぼしそうにない事項は、現代語訳から除外した。

食料（特に米）の値段については、見逃さないよう努力した。

火災に関してはできるだけ具体的に記述した。藩の公用は、ほとんど火消であり、信頼できる資料と考える。

天気並びに天気の影響である気象災害等については、全期間の記述を現代語訳した。気象災害等の記述にこだわったのは、昔の防災気象屋?の本能である。

最初の50年ほどに限定すると、飛脚の所要日数は、出発日時・到着時刻等を含めて、ほとんど記入した。A日に出発してB日振りに到着するとA+B-1日に到着することになる。これがいろいろな事情で必ずしも一致しない。国元か江戸藩邸のいずれかが日付を間違えているのが見えることもあった。その日の日付を確認するためにも役立つ。

このほか、筆者が興味をもつ事項（例えば、「白魚」・「切支丹」）は、稀に記述している。このような事項に興味を持つ読者・正確な数値に興味を持つ読者は、原文に当たっていただきたい。

本書は、先行発行の「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.2」に上書きして作成した。カレンダーの作成等を省略できるからである。この結果、御国で餓死者が続出しているのを見ながら、その上に退屈なお食事などを書くことになった。時代の価値観を反映しているのであろう。ほとんどは、当然本書から除外した。

用語はなるべく変えず、その解説は文中以外には特に付していない。現代と異なる用語は、なるべく原文を生かし、カッコ内に現代語を加えるなどした。現代の用語（例えば、オーロラ・雪崩）で検索すると、生かした原文が見えることがある。原文でもう一度検索すると、その時代の他の用語も見えるかもしれない。

筆者は、一般的な歴史・古文書等に関する知識があまりない、元気象屋である。現代語訳も適切ではない部分もあろうと思われるが、お許し願いたい。

2-3 本書の構成

基本的には、先行する「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1 並びに Vol.2」と同様である。

左端に西暦（グレゴリオ暦）年月日を置き、次いで当時使われていた暦の年月日を記した。その右には毎日の天気等を記述し、1文字分のスペースを置きカッコ内に本文の意を示している。毎日の天気の直後に括弧を付して天気の原文を示したものもある。日記が保存されていない日については「（日記の保存なし）」、日記に天気が記されていないものは「（天気の記述なし）」、虫食いで判読できない場合は「（虫で判読不能）」のように記述した。また必要に応じて若干の補足を加えた。

1日分の記述は、原則として1行である。1行に入らない場合は、「上に続く」として前日の余白に「下から続く」の後に記載し、またはページ最下欄の予備行に記載した。稀に「下に続く」・「〇〇日に続く」とした例もスペースの関係で用いる。

1ページには、西暦の偶数月の月末で終わる2か月分を記載している。ページ毎に数行の予備行がある。1年間は6ページで構成される。同じ季節現象の所在場所は、ほぼ6ページ前か後と推定できる。これが変動することは、気候変化等の影響である。同じ月日が同じページに見えるように、ページ数は、「弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1 並びに Vol.2」と共通にした。本書の42ページまでは、月日のみとなる。

本書は、1661～1700、1701～1740、1741～1780、1781～1820、1821～1860、1861～1868年の各期間に分割して記述した。これでも各部が240ページになり、大き過ぎれば扱いに困ると考えたことによる。

2-4 本書の伝達手段

本書は1661年から江戸時代末の1868年までの208年、資料部分は全体で1242ページとなる。1ページは、空欄があるものの63行×約100文字と、並の文献の比ではない。このため、本解説と資料部分はCD-ROMとした。本書には、同一内容のpdfデータ（読むためにはAdobe Acrobat Readerが必要である。）とExcel・Wordのみで読めるデータの二種類が入っている。これらの検索・コピー（コピー&ペーストの省略：切り張り）・印刷等の利用並びにAdobe Acrobat Readerの入手は、各自で行っていただきたい。

本書は、一寸した辞書並みの情報量である。御国日記を含むデータ部分が2483ページであり、普通の書籍にした場合の重量・値段を想像いただきたい。CD-ROMに収めた結果、重量を100分の1以下（100グラム弱）、価格を10分の1程度とすることができた。読書にはパソコンが別途必要となるが、これは多くの家庭にもあり、検索・コピーが可能になって利用効率が上がることで相殺されよう。

3 補足事項

3-1 本書利用上のお願い等

本書の記載内容は、筆者の読解力・時間の制約があり、間違いが少なくないと思う。しかし、本日記より古い東京の日記・その現代語訳が存在しない状況では、本書から読み取ったデータが重要データとなる可能性が大きい。

本書中の pdf データと Excel・Word のみで読めるデータの二種類は、用途が若干異なるが、全体としてデータベースに準ずる機能を持つ。

pdf データは、簡単には破壊されず、目視・検索・印刷等の利用に適している。特に、全ファイルを横断的・迅速に検索することが可能である。

後者は、コンピュータ本来の（検索・コピー等の）機能が利用できる。コンピュータの操作によってデータが容易に破壊されるが、データが変更され終了した場合、「変更を保存するか」との質問が画面に出る。変更しないように操作すれば元の状態に戻る。しかし、幼児等の操作には対処できない。その場合は、新しい本書を入手されることをお勧めする。

実際の利用例として、適当な期間の「初雪」を検索すると、毎年の中雪の日付、ひいてはその変化が見えるかもしれない。これが変化していれば、地球温暖化等かもしれない。しかし、その前の日付に存在した霽・あられ・雪・霰・みぞれ・雹・丸雪・みぞれ等の記述は、初雪ではないのだろうか。初雪の用語の定義を明確に理解しなければ、初雪を捉えたことにならない。また、上の霽・みぞれ・みぞれ、文目・刃のように同じ意味で表記の相違等があり、検索にも知識が必要である。この場合、全ファイルを横断的に、文字列を変えながら検索可能な pdf データが威力を発揮する。ミソレの用語で検索してみると、霽・みぞれ等の他の記述例も見える。

読者のみなさんのデータ利用・査読の付いた論文としての発表をお待ちする。

間違いの指摘・本書の意図に沿った助言等は、歓迎する。筆者略歴内のアドレスにいただければ、直接の返事ができるものがあるかもしれない。

なお、コピーによる資料作成の一助として、Excel ファイル（コピー&ペースト用 原稿用紙）を添付した。40 年ごとのデータが入った 240 ページの Excel ファイルの全データを除いたものである。先行する弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1、同 Vol.2 に対しても、本書と同様に利用できる。

また、検索等の手法を明示するため、本書のトールケース内に説明用リーフレットを入れた。パーソナルコンピュータは日進月歩であり、手法の明示は、概要に留めざるを得なかった。利用の皆様には、その時点で与えられる最適の手法で検索・情報の取りまとめなどを行われることを期待する。

本書の現代語訳作業は、2014 年から始めた。2003 年から始めた弘前藩庁日記ひろひよみ

Vol.1、同 Vol.2 に続くものである。弘前市立弘前図書館の職員にも関連資料・著作権法等に関してお世話になった。特に、「弘前藩御日記」の著者で図書館に日参されていた田澤正（縦書きであれば、「平出」です。）先生には、度々席にお邪魔して教えを請うた。これらの方々なくして、本書はない。あらためて感謝申し上げる。

本書については、著作権を主張する。しかし、印刷・コピー及びその配布並びに引用・参考文献としての利用は、出典が本書であることを明示すれば自由である。CD-ROM のコピー等は、出典を明示できる情報を添付して、他者に提供願いたい。この取り扱いは、学術論文と同様と考えていただいて結構である。

3-2 各期間の特徴（事件は江戸に関係するものを中心とする）

1668～1700 年

年 号 寛文、延宝、天和、貞享、元禄

弘前藩主 信政

徳川将軍 家綱、綱吉

事 件 シャクシャインの乱（蝦夷地）への派兵、お七火事、竹嶋一件、元禄地震

1701～1740 年

年 号 元禄、宝永、正徳、享保、元文

弘前藩主 信政、信寿、信著

徳川将軍 綱吉、家宣、家継、吉宗

事 件 赤穂事件、宝永地震、富士山噴火、元文の黒船事件

1741～1780 年

年 号 元文、寛保、延享、寛延、宝暦、明和、安永

弘前藩主 信著、信寧

徳川将軍 吉宗、家重、家治

事 件 寛保 2 年の水害、明和の大火、大規模なオーロラ

1781～1820 年

年 号 安永、天明、寛政、享和、文化、文政

弘前藩主 信寧、信明、寧親

徳川将軍 家治、家斉

事 件 浅間山噴火、天明の大飢饉、天明 6 年の水害、蝦夷地警備、文化の大火

1821～1860 年

年 号 文政、天保、弘化、嘉永、安政、万延
弘前藩主 寧親、信順、順承、承烈
徳川将軍 家斉、家慶、家定、家茂
事 件 相馬大作事件、シーボルト事件、大塩平八郎の乱、蛸社の獄、
弘化3年の水害、ペリー来航、安政地震・津波、安政江戸地震、
函館等開港・警衛

1861～1868年

年 号 万延、文久、元治、慶応
弘前藩主 承烈
徳川将軍 家茂、慶喜
事 件 幕藩体制の崩壊

3-3 筆者略歴

福眞吉美（ふくまよしみ）：1942年弘前市生まれ。北海道に育つ。

アドレス：「zvx.yoshimi@s4.dion.ne.jp」

1963年気象大学卒業・気象庁に勤務する。

各地の気象台・測候所等に勤務し、2003年3月秋田地方気象台長をもって定年退職。弘前市に居住する。

1990年代を中心に「防災対策の効果の定量的な評価とその手法」に関する論文を、災害の研究（損害保険料率算定会：平成14年以降の損害保険料率算定機構）、研究時報（気象庁）、天気（日本気象学会）等に発表する。その内のいくつかの論文がIPCC(気候変動に関する政府間パネル)の評価報告書（1995年・2001年）その他に引用される。

2003年4月以降は、弘前藩庁日記の現代語訳と、東北地方以北に昔から存在し今は珍しくなくなったエゾタンポポの増殖に努めていた。エゾタンポポは、数年前から庭に数万輪が咲くようになり、種子が飛散しないよう摘み取る以外は放置している。庭の西洋タンポポは、見付け次第抜き取っている。

3-4 参考文献

内田正男、昭和50年：日本暦日原典、雄山閣出版、

児玉幸多、昭和55年：くずし字用例辞典、東京堂出版、

田澤 正、平成6年：だれでも読める弘前藩御日記 寛文編 上巻 自寛文元（1661）年 至 寛文六（1666）年、新つがる企画、

田澤 正、平成7年：だれでも読める弘前藩御日記 寛文編 中巻 自寛文七（1667）年 至

寛文十（1670）年、新つがる企画、

弘前市立弘前図書館、昭和 45 年：弘前図書館蔵郷土史文献解題、弘前市立図書館、3.

弘前市立弘前図書館、平成 9 年：続津軽覚え書、弘前図書館後援会、154-156.

福眞吉美、平成 22 年：弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.1（1661～1740）、北方新社、

福眞吉美、平成 26 年：弘前藩庁日記ひろひよみ Vol.2（1741～1868）、北方新社、